

まちづくり調査手法としてのオーラル・ヒストリーに関する調査研究

—瀬戸内・弓削町の女性グループを事例として—

日本大学理工学部社会交通工学科 学生会員 ○後藤 主良
日本大学理工学部社会交通工学科 非会員 栗林 寛
日本大学理工学研究科研究生 正会員 堀川 洋子
日本大学理工学部社会交通工学科 正会員 伊東 孝

1. はじめに

わたしどもの研究室では夏のゼミ合宿を利用して、愛媛県弓削町の女性グループ12組(表-1)に対してオーラル・ヒストリー手法をもちいたインタビュー調査をおこなった。きっかけは、特定非営利法人鞆まちづくり工房の松居秀子氏より、「4000人程度の島でなぜ10グループ以上のグループ活動が活発なのか」、「なぜ女性のグループによる活動が活発なのか」という依頼を受けたことによる。

オーラル・ヒストリー手法とは、フォーマットの決まったアンケート調査と違い、対象者に確実に質問することが可能であり、あらかじめ用意した質問項目をもとに、話の展開によってさらに掘り下げた住民の生の声を聴くことができるというものである。

本稿で話題としている漁業は、まず1日目の企画情報課長に対する町の経済・産業・交通・女性グループなどの総括的なインタビューによって、弓削町の主要産業が漁業であることを知った。夜の報告・反省会のとき、他班がおこなったインタビューで、佐島婦人会のEM菌を使った海環境の改善活動の報告を受け、漁業と海環境の改善活動の関係性について感心の目が向けられた。2日目の弓削町漁協組合婦人部長のインタビューでは、1日目のインタビュー成果をふまえ、弓削町における漁業について、詳しく聞くことができた。

本稿では、最終的に12グループ全体についてまとめる一過程として、町の主要産業である漁業と海環境の改善活動について、インタビュー・データの整理・分析をおこない、まちづくり手法としてのオーラル・ヒストリー手法の意義について考察する。

2. 町の概要

愛媛県旧弓削町(2004.10.1より上島町)は、愛媛県と広島県の県境にあり、四方を海に囲まれている。弓削島と佐島の二つの島からなり、面積11.76Km²、人口3,858人、世帯数1,670軒と小さな町である(平成12年度)。

3. インタビュー回答の整理

(1) 企画情報課長へのインタビュー：町の経済

島というと「漁師」のイメージがある。弓削町は、漁獲高・漁獲量ともに愛媛県でも有数の漁港であり、漁業は町の主要産業で、弓削町法人税等の上位を占める。個人経営の漁師でも漁獲量が大きい、漁業に携わる人は少ない。近年は、外国人労働者を雇うようになり、網元制度のように一人の漁師で5人から6人雇って漁業をおこなっている。弓削町に漁師が少ないのは、戦後の造船景気に起因し、当時ほとんどの人は現金収入を得るため漁業や農業を辞めて造船会社に勤務したため、現在ではサラリーマン家庭が多い。

現在の若者は漁業や農業など、第一次産業に興味をもち、行政としては後継者問題に対策を練っている。

(2) 佐島婦人会メンバーへのインタビュー：EM菌

EM菌(Effective Microorganisms:有効微生物群)は、20年ほど前に琉球大学の比嘉照夫教授によって考案された。EM菌には、乳酸菌・酵母菌・光合成菌など80種類以

表-1. インタビューをおこなった女性グループの概要

グループ名	創立年次	人数	活動内容
佐島生活研究グループ	不詳	8人	はっさくマーマレード、さし味噌の製造販売
佐島婦人会	不詳	不詳	EM菌の製造と、それを用いた海の浄化活動
沢津生活研究グループ	1981年	4人	イベントでの焼肉のタレ作り、かつらで籠を編む
JA	不詳	不詳	イベントでの出店(イギリス豆腐、ところてんの製造販売)
ちゅーりっぷぐるーぷ	不詳	7人	保健センターの庭や弓削大橋佐島側での飾花活動と園芸療法
菜の花生活研究グループ	不詳	5人	イベントでの出店(蒸しパン、ドーナツの販売等)
ハーバル	不詳	20人	上島町弓削海水温浴施設「潮湯」へのハーブの提供
ポケット	1994年	8人	町内の広報を朗読しテープに吹込み、視覚障害者やお年寄りに配布
ゆげ女性塾	1993年	17人	海草押花と手作り石鹸の販売
弓削婦人会	不詳	約400人	イベント等でのボランティア
弓削町栄養改善協議会	1995年	30人	保健センターと住民の間に入り、食事指導
弓削町漁協婦人部	不詳	37人	海産物加工販売(鯛めし、海苔の佃煮等)

キーワード：オーラル・ヒストリー、インタビュー、まちづくり、弓削町

連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 電話 047-469-5572 FAX047-469-2581

上の微生物がふくまれ、海や湖をきれいにするだけでなく、油污れや悪臭などを緩和させる働きがある。

佐島婦人会では、EM菌を使いヘドロを分解し、海環境の浄化運動をおこなっている。EM菌を土に混ぜ込みEM菌団子をつくる。これを海に投げ入れ、海を浄化し、アサリなどの貝類が住める海づくりをしている。ヘドロはなくなり、小魚が生息しているのが確認されている。

(3) 弓削町漁協組合婦人部長へのインタビュー

a) 漁協組合の活動

漁協組合では、冬は海苔養殖、春は定置網漁をおこなっている。魚の種類は以前に比べ少なくなり、弓削町では天然真鯛が特産である。男性は海で仕事をおこない、女性は陸で仕事をおこなう分業制である。漁師の妻になると、自動的に漁協組合婦人部に入会するが、活動への参加は自由である。

漁協組合婦人部は、海苔と佃煮の製造をおこない、海苔の一日の製造枚数は20万枚で、日本一である。海苔の養殖場所は、地形の関係から底深い海でおこなうため、海苔は硬いが、コンビニで売られているオニギリに適する。海苔の佃煮は、弓削町の商店や、東京新橋のアンテナショップ旬彩館（愛媛県と香川県との共同出店）でも販売している。

b) 漁業活動

弓削町の漁業は、個人漁師と違って夫婦二人でできず、人を雇っておこなう網元制度のような経営である。以前は青森などから雇っていたが、今では前述したように外国人を雇っている。収入は、毎月決まっておらず、しかも不定期である。しかし生活水準は高く、豊かな生活ができるのは漁協組合がしっかりしているためである。

弓削町の漁師は、船舶や機械を買うときの借金は、保証人を立てる必要がなく、愛媛県信用漁業組合が準備してくれる。そのため月毎の収入がなくても、普通の生活が送れるが、漁協組合婦人部長は、システムが崩れた場合、今までの豊かな生活ができなくなるという危機感を抱いている。

c) 漁港、漁場の現状

弓削町の漁港では、漁業に関係ない遊び舟が占拠し、漁船の停泊場所がなくなるという問題がある。さらに漁法は定置網漁のため、密漁者に対して強い姿勢をとることができない。何故なら注意をすると、定置網を破くなどの仕返しをされるからだという。漁協組合では、密漁対策のため人工漁礁を入れている。人工漁礁は水産資源を育成・保護するために設置されるが、弓削町では人工漁礁を設置することで密漁者の道具を傷め、密漁を防ぐ

ためにもおこなっている。こうした対策をおこなうため、組合長は埋立工事のとき補償金をもらう代わりに、人工漁礁を設置してもらうなど、知恵と工夫を生かした運営をおこなっている。

4. おわりに

a) まちづくり調査手法としてのオーラル・ヒストリー

1日目のインタビューで、企画情報課長からは、漁業が弓削町の主要産業であること、佐島婦人会メンバーからは、EM菌を使った環境の改善という、海環境に対する住民の関心の高さを知ることができた。そして2日目のインタビューでは、漁協組合婦人部長へのインタビューによって漁協組合の活動・密漁対策・弓削町の漁師の収入と生活スタイルの問題など、町の漁業に関わるさまざまな事柄を聞くことができた。

オーラル・ヒストリー手法はアンケート調査と比べ、インタビューの承諾手続きや、ある程度の信頼関係を築かなければインタビューをおこなえない、インタビューは1回だけではなく、数回にわたっておこなうため多くの時間が必要となるなどの難点がある。

しかしアンケートでは、当初の枠組みである質問項目以上のデータを得られないのに対し、オーラル・ヒストリーは当初の聞きたい事柄だけでなく、話の流れの中から、まちの歴史や地域住民の心情などがわかり、単なる文字情報の文献や数値を知ると違って、データの見処や強弱、絞り込みなどを感じ取ることができる。キーパーソンを選別することで、聞き出したいことの絞り込みも可能である。話の展開によっては、新たな発見や抱えている問題点などを見出すことができ、深めることも可能である。調査者としては、町の全体像を比較的安易に描くことができる。まちづくり調査手法としては、ひじょうに有効で、しかも人を得れば効率的な手法といえる。

b) 女性グループ活動と町の活性化

弓削町は生活を営むうえで不便の多い島町であるが、インタビュー結果から、自分たちの力で住みよい町にしようとする意識や行動力がうかがえた。これは島内に国立弓削商船高等学校があって船乗りが多いという事情のなかで、女性が家庭を守るという弓削町独自の気質との関連も考えられるが、詳細な分析は今後の課題としたい。

今後、他の11グループについてもインタビュー内容の整理をおこない、研究の最初の動機である「10グループ以上の女性グループがなぜ活発なのか」について考えていきたい。まちづくり調査手法としてオーラル・ヒストリーの可能性について、さらなる検討をおこないたい。